

## 現代型衣生活の形成過程における着装観の変容

### 大分大教育 村田仁代

**目的** 現代衣生活に関する研究の一環として、本研究では着装状況の変遷を通じ、今日の着装観がどのように形成されたかを論究する。なお本研究に先立って実際に広く着用されたと考えられる婦人服の製図をもとに、各部位に注目し、具体的に今日までの変容を明らかにしたが、今回はその研究成果を発展させ、人々の着装意識に関する究明を行なう。

**方法** 自家縫製・注文仕立てに代わり、既製服の利用度が高まってきた1960年から最近の1991年までの約30年間の、服飾専門誌である『装苑』等に掲載された着装の状況・意識に関する記事を収集し、分析を行なう。

**結果** すでに1960～1991年のジャケットの雑誌掲載製図6600点を対象に、着装観に関わる肩幅・アームホール・バストライン等のフィット性を考察した結果、70年代後半以降、それ以前とはゆとり量に大きな差異が見られることを実証し、報告を行なった。これは言うまでもなくビッグファッションが契機となるものである。この流行は以前のミニと対置するものとして、形態のうえで大きく異なることから創出されたが、流行を受け入れた着用者側には形態のみにとどまらず、着装意識の変革までも起こさせるものとなった。すなわち、従来のシルエットを第一義に考え、身体を補整し着用することが当然であったものが、ゆとり量が大きく、着やすさを第一とする観念が定着し、今日に至った。そこでライン等を重視するデザイナー主導の流行形態が後退し、着用者が選択する状況への移行が見られるようになった。それ以降の流行動向では、初期の余りにも長大なものは見られなくなったが、フィット性を重んじる形態でも肩・袖等のゆとりが前提とされている。